専修大学
創立130年
記念企画
第04回

日本を変える、
世界を動かす！
社会知性の
チカラ
The Potentiality for "Socio-Intelligence"

地方の時代、その最前線

この国のあり方を地域から変える新たな挑戦

「地方の時代」といわれて久しい。専修大学で学び、そして得たものを胸に、地方で活躍する卒業生たち。「地方から中央を変える」その火付け役の一人である東国原知事をはじめ、専大卒業生一〇人の熱い思いを紹介する。

宮崎、そして後輩たちにも意識・実践してほしいオンリーワン

小学生の頃から東京に憧れ、将来は芸人と政治家になりたいと思っていました。高校を卒業後、念願の東京の大学を受けさせてもらえることになり、専修大学の経済学部に入学しました。ただ私にとっては大学の校舎だけが学校ではなく、「東京全部が学校」でした。

たとえばアルバイト。家庭教師や交通量調査員のほかに、書類のデリバリーや夜勤もこなし、さまざまな業種のことや社会の裏側についても学びました。

授業への出席は、多いほうではなかったですが、鮮明な記憶もあります。今では考えられませんが、雪が降った後、生田校舎へ向かう坂道が凍結してしまいました。学生たちは、職員の方が垂らしたロープを握って坂を上っていったものです。

また千葉県の野球の強豪校出身の友人たちと、校舎中庭でキャッチボールをしていたとき、捕手役の私が速球を取り損ねて、校舎のガラスを割ってしまったこともありました。このときはなんと、全員が小学生のように中庭に立たされました（笑）。

宮崎から東京へそして別の地方も知った

地元の宮崎と東京以外の「地方」を初めて実感したのも、大学の友人や当時住んでいた共同下宿でした。専大で初めて口を聞いた友人が、たまたま山形の寒河江（さがえ）出身でした。彼の山形弁や会話に出てくるサクランボや雪……。また下宿に各地から届く段ボールには、それこそ「地方」が詰まっていました。

卒業後の芸人生活や早稲田大学での学びの期間を経て、宮崎県知事に就任するに当たっては、「以前のスタイルを壊そう」と考えていました。その気持ちは今も変わりません。

法令やシステムなどの「制度」、県民や職員の「意識」、予算、立地といった「物理」的な事柄、これらを既成の概念やスタイルで考えるのではなく、県民自らが考え、選び、行動する。第一次産業の強化や県産品のPRに加えて、オンリーワンをつくっていくことが、今の地方に必要なのだと思います。

「宮崎県を太陽光発電日本一の県にしよう」というのも、その一例です。議会の賛同も得て、一案件当たり最大三〇〇万円の融資や大型ソーラー設置も視野に入れています。

学生の皆さんも、オンリーワンを目指してほしい。きまじめで従順という校風もあるでしょうが、そんな枠やスタイルを取りはずして型破りで自由奔放に、ゼロか一〇〇かの生き方もいいのではないでしょうか。

宮崎県知事
東国原英夫 31
（1980年経済学部卒業）

宮崎県都城市出身。専大在学中に、同大の学生ながら芸能界で活躍していた小堺一機さんに刺激を受ける。卒業と同時にビートたけしさんの一番弟子となって芸能界デビュー。後に、早稲田大学第二文学部および政治経済学部でも学ぶ。07年1月、第52代の宮崎県知事に就任。

与えられた環境で努力することの大切さを空手で学んだ

西島 代表取締役社長
西島篤師 32
（1974年経済学部卒業）

愛知県出身。工作機械メーカーの西島に入社。76年、ドイツへ留学。マンハイム大学で経済学、カールスルーエ工科大学で工作機械学、機械設計学を学ぶ。同社は「定年制のない会社」としてメディアでもたびたび紹介される。

学生時代は三年間、生田学生寮空手同好会に所属していました。空手は未経験だったのですが、寮の歓迎会で、先輩から熱心に勧誘していただき、誘われるままに入部しました。

練習はとても厳しいものでしたが、誘ってくれた先輩への手前もあって、必死に取り組みました。おかげで、三年生のときには黒帯を取り、主将も務めさせてもらいました。

卒業後、先代の社長の勧めでドイツに六年間留学しました。ドイツの大学はすべて国立大学で、入学許可は日本での最終学歴の成績で決まります。専大時代に頑張って勉強したかいあって、第一志望のマンハイム大学に入学できました。

ドイツでは、言葉や生活習慣など戸惑うこともありましたが、ここでも空手が役立ちました。地元の警察署などで空手を教えることで、とけ込むことができたのです。どこで何が役に立つかわからないものです（笑）。

だからこそ、学生の皆さんも、学業や運動など、いろいろなことに積極的に挑戦してほしいと思います。

みんなで力を合わせて何かを成し遂げるという喜びを野球を通じて経験した

平林金属 取締役副社長
平林 実 33
（1985年経営学部卒業）

岡山県出身。金属リサイクル業の中田屋に2年間勤めた後、家業であり、家電リサイクル業を営む平林金属に入社。「岡山県ごみゼロ社会プロジェクト推進会議」委員を務めるなど、環境問題にも熱心に取り組む。

高校まで野球をやっていましたので、大学でも軟式野球クラブに入りました。大学三年生のときには関東学生選手権で優勝したのが、学生時代の一番の思い出ですね。

卒業後は東京の会社で二年間修業し、リサイクル業のノウハウを学びました。

地元に戻ってからは、本業の傍ら、地域活性化のお役に立てればと思い、岡山青年会議所の専務理事を務めさせていただいたりしています。

立場上、採用面接などで多くの学生さんと話す機会があるのですが、年々、能力は高いのに、それをうまく出せない人が増えているように思います。

集団で力を合わせて何かを成し遂げたという経験が不足しているのか、コミュニケーションや自己表現といった社会的知性が乏しいようです。

専大では「社会知性」を二一世紀ビジョンとして掲げています。学生の皆さんには、本業の学問以外にも、いろいろなことに積極的にチャレンジして、社会に出てから生きていくための知性を身につけていただきたいですね。

創意工夫と先見性で地方の活性化を牽引
—専大時代の人と知の財産

井波彫刻・彫刻師
今井幸太郎 36
（1977年商学部卒業）

富山県出身。2年半ほど会社勤めを経験した後、220年の歴史を誇る伝統工芸、井波彫刻の彫刻師となるべく、祖父の初代幸太郎、父の2代目幸太郎に師事。99年、3代目幸太郎を襲名。

4年間の寮生活を通じて、いい友人に恵まれたことが学生時代の最大の財産です。15人ほどの共同生活でしたが、旅行がてら互いの実家に遊びに行き合うなどして、友情を深めました。今では、なかなか会う機会はありませんが、時々連絡を取っては近況を報告し合っています。

みろく屋 代表取締役社長
山下洋一郎 35
（1974年経済学部卒業）

長崎県出身。大丸ピーコック下北沢店に2年間勤務した後、長崎名物ちゃんぽん、皿うどんの製造・販売、レストラン経営などを行なう、みろく屋に入社。97年、代表取締役社長に就任。

学生生活＝広告研究会での活動といってもいいくらいです。いい仲間に恵まれ、妻ともそこで知り合いました。次男も専大OBで、親子で校友会活動をしています。親子3人がお世話になった恩返しの意味も込めて、現在、校友会長崎県支部長を務めさせていただいています。

室蘭市長
新宮正志 34
（1958年商学部卒業）

卒業後、室蘭市役所に就職。95年に室蘭市長（現在4期目）に就任し、現在は北海道市長会会長も兼任。市を挙げて、ポリ塩化ビフェニル（PCB）廃棄物処理事業にも積極的に取り組んでいる。

入学当時、東京は戦後復興の勢いに溢れていました。逆境においても新しいものをつくり出そうとする熱気のなかで、全国から集まった未来の夢に溢れる学友たちに出会ったのです。この体験は「市民と手を取り合い、逆境をバネにしていく」今の室蘭の町づくりにつながっています。

佐渡市役所総務部
世界遺産推進課・調査係主事
若林篤男 40
（2002年文学研究科修士課程修了）

新潟県出身。旧真野町教育委員会に入職後、市町村の合併により佐渡市教育委員会へ。佐渡金鉱山遺跡の世界文化遺産登録推進業務に携わる。在学中は日本古代史を専攻。

学生時代、中央から見た地方というテーマで研究をしたことで、自分の故郷を見つめ直すことができました。「ないものねだりからあるもの探しへ」をキーワードに、佐渡にしかないもの、佐渡だからこそといった部分を構築し、10年、20年先を見据えた地域活性化を目指しています。

老舗そば屋「田中屋」3代目
清水康智 39
（1996年経営学部卒業）

東京都出身。杉並区西荻窪で昭和13年から続く老舗そば屋の3代目。大学卒業後、家業を継ぐ。在学中は軟式野球のサークルに所属し、部長も務める。父、いとこも専大OB。

奥田和彦先生のゼミで消費者行動論を学びました。それまでは引っ込み思案なタイプだったのですが、レポートの発表などで何度も人前で話しているうちに、もの怖じしない性格になりました。大学の4年間は、いろいろな経験をして、人間的に大きく成長した時期だと思います。

今村記念法律事務所・弁護士
大山 勉 38
（1991年法学部卒業）

栃木県出身。01年、司法試験合格。弁護士過疎対策の一環として、鹿児島県の鹿屋ひまわり基金法律事務所長就任。地方の生活者や中小企業の視点に立った弁護活動を心がけている。

司法試験受験生活のほとんどを、大学の研究室で過ごし、多くの盟友と出会いました。今の仕事をするうえでも、専大で得た学問や人脈が大きく役立っています。学生の皆さんには、大学の人的・物的資源をフルに活用して、人生の礎を築いてほしいと思います。

海老名市長
内野 優 37
（1978年法学部卒業）

神奈川県出身。海老名市役所での勤務を経て、83年海老名市議会議員に当選。以来、連続4期当選し、副議長・議長を歴任。03年、海老名市長に当選、現在2期目。

市職員、市議、市長と立場を変えつつ地方自治に携わってきました。その間、専修大学で学んだ法律学はさまざまな場面で知識・経験の源となりました。今後も、専大建学の精神である「報恩奉仕」を常に意識し、市民のための町づくりに誠心誠意、取り組んでいきたいと思います。